

I ICT活用のポイント

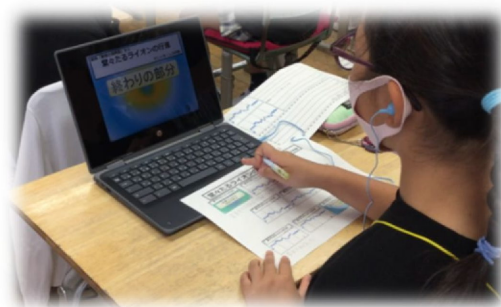
○生活や社会の中の音や音楽、音楽文化と豊かに関わる資質・能力を育むための学習ツールとしてICTを積極的・効果的に活用する。

○実際に見る、聴く、触れるなどの身体感覚を働かせて学習する活動とICTを活用する活動を学習のねらいに応じて教師が見極め、適切かつ効果的に活用する。

音楽科ではこれまでも児童生徒が聴覚や視覚など様々な感覚を働かせ、より音楽を捉えやすくしたり、よさを感じ取りやすくしたりするために、視聴覚機器等を活用してきました。この方向性はICTの活用においても変わるものではありません。

2 実際の活用例

- ・1人1台端末で範奏を聴きながら各パートを演奏したり、自分たちの演奏を録音・録画したりするなどして表現の仕方を工夫する。
- ・インターネットを活用して、曲の背景などについての知識を得ながら、歌唱・器楽で表現するための思いや意図を深める。
- ・音楽制作ソフト等を活用して即興的に音楽をつくったり、表したい音楽のイメージを豊かにしたりする。



○授業のねらいに応じて、機能や活用場面を厳選する。

○児童生徒が感覚を働かせたり表現の工夫を促進したりするなど、音楽科の特質に合わせた活用を行う。

3 実践事例の紹介

【小学校・6年・音楽・「曲想の移り変わりを味わおう」】

育成を目指す資質・能力

B1（個に応じた学習）

曲想の変化と音楽の構造との関わりについて理解し、曲全体を味わって聴くことができる。

ICT活用のポイント 【活用したソフトや機能】 学習支援ソフト

1人1台端末で楽曲を鑑賞することで、個々のペースで鑑賞活動を行うことができる。

学習の流れ

楽曲を一齐に聴き、曲全体の雰囲気をつかむ。

知覚・感受したことを共有し、楽曲について知る。

4種類の旋律を1人1台端末で聴き、曲想の移り変わりを聴き取る。

全体で聴き取ったことや感じ取ったことを共有し、再度一齐に楽曲を聴く。

事例の概要

本題材は、学習支援ソフトを活用した鑑賞の実践である。これまで鑑賞の授業は一齐に楽曲を聴き、学習を進めてきた。しかし、児童それぞれが「もう一度聴きたい」と感じる部分は様々である。1人1台端末を活用することで、個々のペースやニーズに合わせて鑑賞の活動を進めることができると考え、本題材を構想した。

今回は「ハンガリー舞曲第5番」を曲想の変化によって4つの部分に分け、学習支援ソフトのカードに旋律データを貼り付けて配付することで、児童がそれぞれ聴きたい部分を選んで鑑賞できるようにした。聴き取ったことや感じ取ったことを記述するワークシートは紙のものを配付し、聴きながらメモできるようにしている。全体で一齐に鑑賞する場面と、個々で鑑賞する場面を作ることで、曲全体を味わって聴くことにつながるよう構成した。

【中学校・2年・音楽・「動機を生かした旋律をつくろう」】

育成を目指す資質・能力

B4（表現・制作）

リズム・旋律を知覚し、課題や条件に沿った音の選択や組合せなどの技能を身に付け、創作で表すことができる。

ICT活用のポイント 【活用したソフトや機能】 音楽制作ソフト

音楽制作ソフトを活用して、動機を生かしたまとまりのある創作表現を創意工夫する。

学習の流れ

2部形式を理解し、動機を模倣して旋律をつくる。

動機のリズムと対比したリズムを基に、2部形式のBの部分をつくる。

リズムを変化させたり、非和声音を加えたりして、旋律を工夫する。

事例の概要

本題材は、1人1台端末上で音楽の制作ができるソフトを使用した旋律創作の学習である。このソフトを用いる利点は、楽譜を読むことが苦手な生徒でも創作活動を円滑に取り組むことができる点である。また、創作した音楽を再生することもできるので、生徒はつくって聴くという活動を繰り返し、試行錯誤して作品を自分のイメージへと近づけることができる。本題材では2部形式を用い、Aの部分は、2小節の動機に続く3・4小節に予め動機と同じリズムで「ソ」の音を入れたデータを配付し、音高のみを変化させた。Bの部分では、和声音の2分音符のみで旋律をつくり、その音を基に動機と対比したリズムを当てはめて創作を行った。最終的に、形式のルールを緩めたり、非和声音をつかったり、跳躍進行や順次進行の特性を生かしたりするなど、創造的に制作できるよう授業を構成した。

Webサイトには、上記の実践以外に、次の事例も掲載しています。

○小学校4年・・・旋律の特徴を感じ取る鑑賞の実践

○中学校1年・・・箏の奏法を学ぶ器楽の実践

